

Part 2

錦絵にみる江戸時代の風俗

Nishiki-e featuring the customs and atmosphere of the Edo period

ここでは歌舞伎の場面や役者を描いた錦絵、江戸の様子、着物など、江戸時代の風俗が描かれた錦絵を紹介します。歌舞伎役者や場面を描いた錦絵は、歌舞伎の隆盛と共に大量につくられました。歌舞伎のストーリーには貨幣や財布が出てくる場面が多く、錦絵にそれらの場面が描かれたことから、当館の錦絵コレクションの一群をなしています。





24

浪花福富舞臺図絵 A lottery drawing ceremony in Osaka

柳斎重春 Ryusai Shigeharu (1802-1852) / 19世紀前半 early 19th century 38 × 78 900137

江戸時代の富（「富くじ」）興行を歌舞伎の舞台に見立て描いている。幕府は、富は賭博の側面が強いとし、禁止や統制の対象とした。富興行は寺社が建物の修復の財源とするために、幕府の許可を得て主催することが多かった。富札（番号入りの紙札）を発売し、抽選の際、番号の書かれた木札を箱に入れ、箱の小穴から錐で木札を突いて当選番号を決め、賞金を支払った。右に抽選用の木箱、中央の人の左手の錐の先には当選番号の木札が描かれている。舞台の下には当選を願い集まった多くの人々が描かれ、画中の貼り紙には「この錦絵を家に貼って富札を買えば当選する」と書かれている。

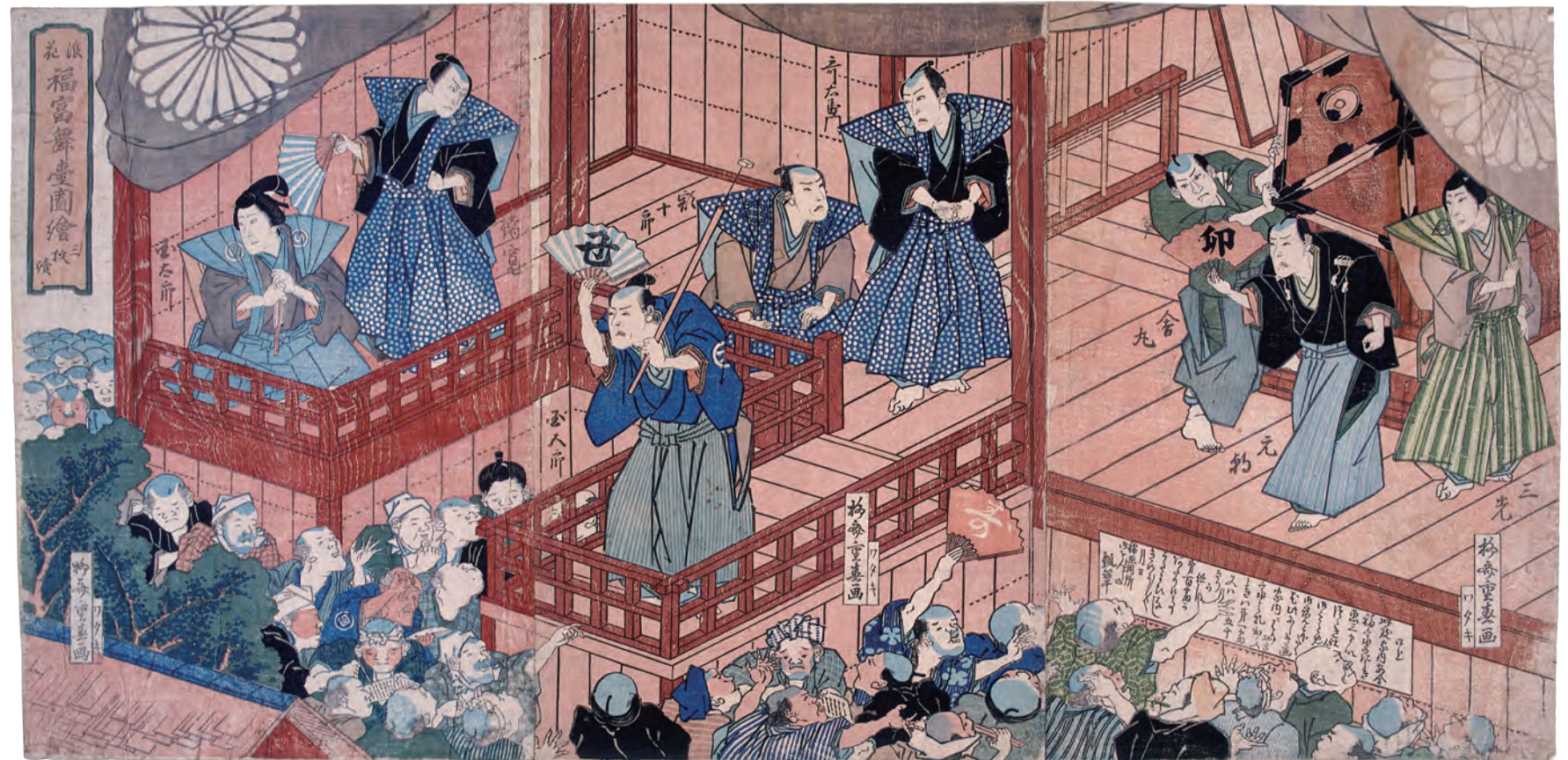
柳斎重春は有名な大坂の絵師。錦絵は江戸で多く作られたが、役者絵を中心として大坂や京都でも作られ、上方絵とよばれた。

23

十二月ノ内霜月酉のまち A shrine festival in November

三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1854 36 × 74 900273

「酉のまち」（酉の祭）は酉の市ともよばれ11月の酉の日に開かれる鶯神社の祭礼。祭りの当日には市が立ち、開運や商売繁盛などを願う熊手や餅、芋などが縁起物として売られた。右の丁稚が持つ熊手には幸運・金運をかき集める縁起物として千両箱や小判が付けられている。御高祖頭巾を被った中央の女性は富を願う「黄金餅」ともよばれる粟餅を、左の女性は出世や子宝を願う「頭の芋」（唐の芋）ともよばれる里芋の一種を手をしている。江戸後期より下谷浅草の酉の市の賑わいが有名。歌川派の「年玉」印の黒い枠内に題名が書かれたこの作品は、三代歌川豊国が、江戸の年中行事や風俗などを12ヶ月分に分けて描いた3枚続きの美人画揃物「十二月ノ内」の一図。





25
春色花の魁 A man and two women stand before plum blossoms, a herald of spring
三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 19世紀半ば mid-19th century 34 × 77 900274

26
當勢和歌参人 Two men and a woman enjoy plum blossoms in spring
三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1857 34 × 70 900275

梅の開花を楽しむ人々。梅は古代から春を告げる花として、和歌などに詠まれてきた。観梅も四季を楽しむ行楽として江戸時代中期から盛んになった。25の一番左、26の一番右の男性が持っているものは縁起物で、豊作を願う柳などの木の枝に繭の形をした餅や団子や千両箱などの縁起物の飾りをつけた繭玉。人々はこれを主に小正月に神社などで買い、神棚に飾った。26の題名は、「当勢和歌三人」（今勢いのある歌人3人）となっている。これは、当時勢いのある若手歌舞伎役者3人（右から三代目市川市蔵、三代目岩井衆三郎、初代中村福助）を「和歌三神」（和歌の守護神3人）になぞらえ、歌人に見立てている。



27
大井川徒行渡図 Crossing the Oi River in Shizuoka
豊原国周 Toyohara Kunichika (1835-1900) / 1860 37 × 76 900272

大井川（現静岡県）を渡る人々の様子。輦台や駕籠で渡る女性、肩車で渡る女性や旅行者の荷物を運ぶために渡る人足達が描かれている。川岸では人足が暖をとっている。右手が東、左手が西で、右手奥には富士山が描かれている。当時、川幅はおよそ1.3kmあったが、技術的な問題や防衛上の理由などから架橋されず、旅行者は人足に担がれて川を渡った。川越の料金は、その時の水位により決められ、また肩車による渡しが基本で、中央の女性2人のように輦台に乗ると、多くの人足が必要なことなどから料金が高くなった。氾濫の多い大井川は、悪天候が続くと水位が増して渡れず、旅人は何日も足留めされ、東海道最大の難所と言われていた。



28

吾嬬下五十三駅 大井川 Packhorse driver trying to pick up a purse dropped by a female thief in a scene from a Kabuki play
 三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1854 36 x 74 900288

歌舞伎「吾嬬下五十三駅」(河竹黙阿弥作、1854年上演)の大井川の場面。
 女盗賊人丸お六(左、坂東志うか)が馬から下りる際に落とした財布を拾おうとする馬士胴八(右、三代目嵐璃寛)と、それを阻止しようとする旅中間直助権兵衛(四代目市川小团次)。
 物語は鎌倉時代を舞台とし、主人公たちが京都から鎌倉へと東海道を旅する中で、幽霊が登場するなど荒唐無稽な仕立てであるが、將軍の継嗣問題など幕末の政情不安を風刺した演目と言われる。



29

与話情浮名横櫛 向疵乃与三 こうもり安 Gang members with gold coins in a scene from a Kabuki play
 三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1853 36 x 25 900353



30
与話情浮名横櫛 井澄屋 向疵乃与三

A shop manager hands his money to a gang member in a scene from a Kabuki play

三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1853 25 × 36 900355

実話を元にした恋物語の歌舞伎「与話情浮名横櫛」(1853年初演)の一場面を描いた作品。お富は伊豆屋の若旦那与三郎と引き裂かれ、海に身を投じたが、質屋和泉屋<井澄屋>の番頭多左衛門に助けられ、多左衛門の元で暮らしていた。3年後、やくざ者となっていた与三郎(向疵の与三)らが多左衛門の家にやってきた際、男と暮らしているお富をみつけ、責める。多左衛門は与三郎に小判を与え、これを元手に始めた商売が軌道に乗ったら、お富を迎えに来るようにと諭した。お富は多左衛門に「与三郎は兄である」と説明したが、実は多左衛門こそが実の兄であった。29は多左衛門から受け取った紙に包まれた小判を、与三郎(右、八代目市川團十郎)が、安(左、こうもり安、初代中村鶴藏)と分けている場面。30は続く和泉屋の店頭で、悪事を働いた次の番頭藤八<丈六>(左下、中山市藏)と与三郎が切ろうとし、番頭多左衛門(中央、三代目関三十郎)がお金を渡し止めようとしている。その右のお富(四代目尾上梅幸)の後ろには質屋の帳場と帳簿が描かれている。



32

馬切り 三七郎信幸 A robber is surrounded in a scene from a Kabuki play

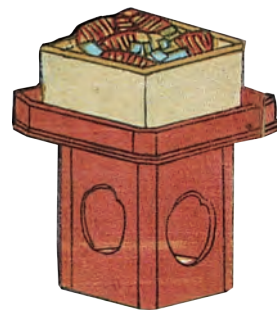
豊原国周 Toyohara Kunichika (1835-1900) / 19世紀後半 late 19th century 36 × 74 900276

歌舞伎の一場面、通称「馬切り」とよばれる。初代中村宗十郎(1835-1889)扮する三七郎(中央)が大坂で馬子を切り捨て、高野山へ献上する千両箱3つ(3,000両)の載った馬を奪い、それを捕手達が囲んでいる。もとは歌舞伎「傾城青陽鷄」(1794年初演)の一部で、この場面が独立して上演された。取り囲んだ捕手を尻目に、小判を積んだ馬を引いて立ち去る三七郎の颯爽とした姿が見物で、この場面は錦絵に多く描かれた。取り囲む捕手は右から市川新十郎、中村相蔵、三代目市川市十郎、三代目片岡我童、中村銀之助、三代目片岡我當。

三七郎の黒い着物には「正面摺り」という技法が用いられており、違う角度から見ると光の反射具合によって着物の柄である紗綾形が浮かび上がる。



あんまねぶ市と芸者おみつ



豆まきのように升から小判等を撒く。

31

誉大尽金の豆蒔 紀文大尽 A rich merchant scatters money in a scene from a Kabuki play

豊原国周 Toyohara Kunichika (1835-1900) / 1866 36 × 74 900284

歌舞伎「誉大尽金の豆蒔」(1866年上演)の一場面。中央の紀文大尽(二代目沢村訥升)が、豆まきのように升から小判を撒く様子が描かれている。紀文大尽は17世紀に実在した豪商紀伊国屋文左衛門をモデルにしている。彼は謎に包まれた政商で、材木の売買で巨額の富を得て、金貨をばらまいたといった逸話が数多く残され、歌舞伎にも取り上げられた。他の配役は、右から小夜衣(二代目坂東玉三郎)、三浦内喜長(五代目大谷友右衛門)、あんまねぶ市(二代目中村福助)、芸者おみつ(六代目坂東三津五郎)。

絵師の豊原国周は三代歌川豊国に学び、歌舞伎役者の似顔絵を得意とした。





33
木曾街道六十九次之内 草津 冠者義高

The Kusatsu post station as seen in a Kabuki play; from the series The Sixty-nine Stations of the Kiso Road

歌川国芳 Utagawa Kuniyoshi (1797-1861) / 1853 37 × 25 900217

32と同じ歌舞伎「馬切り」の一場面、三七郎（右、八代目市川團十郎）が馬子（左、中村鶴藏）から三千両を奪い取る場面を描いている。「木曾街道六十九次」は、歌川国芳によって1852～1853年に制作され、作品71点、目録1点の計72点で構成される。街道の錦絵は風景を描く作品が多いが、国芳はこのシリーズでは視点を変え、当時の人々が楽しんだ物語の一場面を描いた。コマ絵には街道の風景も描かれ、一つの作品で物語絵と名所絵の両方を楽しめる趣向となっている。草津宿（現滋賀県）は、江戸から分かれて西進した木曾街道（中山道）と東海道が京都の手前で再び合流する地点。左上のコマ絵の枠の形は馬の草鞋を象っている。



34
木曾街道六十九次之内 奈良井 おろく 善吉

A comb storefront at the Narai post station; from the series The Sixty-nine Stations of the Kiso Road

歌川国芳 Utagawa Kuniyoshi (1797-1861) / 1852 37 × 25 900216

おろく（右）と善吉（左）の夫婦は曲亭馬琴『青砥藤網摸稜案』（1811年出版の読本）の登場人物。店では「名物於六くし」という看板が掲げられ、名産の木製の櫛が売られている。木曾街道奈良井宿（現長野県）は山深く、峠越えに備えて宿を取る旅人で賑わっていた。この辺りは木製品が名産であったが、「おろく櫛」は19世紀の初め頃、隣の敷原宿で「お六」という女性がツゲを材料に作り始め、歯が細くて長い櫛がこの地方の名産品になった。木曾の山々の描かれた左上のコマ絵の枠の形も櫛の形を象っている。歌川国芳は幕末の絵師で、武者絵で有名だが、それ以外にも豊かなアイデアで風刺画や戯画などを広範囲に手掛け、多くの作品が残っている。



35
東海道五十三次の内 藤川駅 佐々木藤三郎

A Kabuki actor wears a kimono with a copper coin pattern at the Fujikawa post station; from the series The Fifty-three Stations of the Tokaido Road

三代歌川豊国 Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 1852 37 × 26 900342

東海道藤川宿（現愛知県）を背景に寛永通宝をモチーフとした着物姿の二代目尾上多見蔵（1800-1886）を描いた大首絵。「役者見立東海道五十三駅」シリーズの1枚で、五十三次の地名にちなんだ歌舞伎の登場人物が、当時の歌舞伎役者の似顔で描かれ、背景にある各宿の風景は歌川広重の「東海道五拾三次」シリーズを利用している。当初、55枚でシリーズは終了する予定であったが好評で、続編も発行された。



36
肴や喜三郎 坂東三津五郎 A man preparing fish is surprised by a cat's scattered gold coins in a scene from a Kabuki play

初代歌川豊国 Utagawa Toyokuni I (1769-1825) / 19世紀初め early 19th century 38 × 26 900330

三代目坂東三津五郎（1775-1831）扮する肴や喜三郎が魚をおろしているところに、巾着をくわえた猫が屋根を通り、巾着に入っていた小判を撒き散らしている。絵師の歌川豊国は、歌川派の創始者・歌川豊春の門人で、庶民の人気を勝ち得て歌川派隆盛の端緒を開き、門下から優秀な画家を輩出した。歌川派は江戸後期の浮世絵全盛期をつくりあげた。



38
岩城升屋店前之図 The Edo storefront of the cloth merchant Iwaki Masuya

初代歌川広重 Utagawa Hiroshige I (1797-1858) / 1850年頃 around 1850 35 × 71 900181

江戸の麴町五丁目の呉服屋岩城升屋が繁盛する様子と町の賑わいを透視図法で描いた作品。岩城升屋は江戸・大坂・京都で呉服を営んだ大店。「現金無懸直」の看板、岩城升屋を示す屋印（マーク）がデザインされた暖簾、暖簾の隙間から見える接客風景など、江戸の呉服屋の雰囲気が見て取れる。岩城升屋が宣伝のために版元佐野屋喜兵衛に制作を依頼した作品である可能性が高い。絵師の歌川広重は風景画で名を馳せた。



37

王子稲荷参詣群集之図 Visitors to Oji Inari Shrine in Edo pray for prosperity

三代歌川豊国（国貞） Utagawa Toyokuni III (1786-1864) / 19世紀前半 early 19th century 35 × 73 900396

江戸の近郊、王子稲荷に参詣する人々。近くにある飛鳥山の桜も名所となり、18世紀半ばから参詣者が増加し、周辺に多くの料理屋・茶屋ができ賑わった。狐の石像と共に、左から3人目の左袖部分に「暫狐」とよばれる王子稲荷土産の紙の人形が描かれている。歌舞伎役者の九代目市川团十郎が「暫」の上演にあたり、王子稲荷に祈願して大当たりしたことから、舞台姿の狐のからくり人形が土産として有名になった。

神社の柵には薬の広告の看板が見られるが、これは版元が薬の販売も行っていたため、錦絵を通じて宣伝をしていたものであり、錦絵が大衆メディアでもあったことを示している。



王子稲荷土産の紙の人形「暫狐」